

健康文化

「人の人たる人は人を人とす」
……江戸時代の教師像を考える

高木 靖文

はじめに

標題の言葉は、江戸時代の初期に笹山梅庵が書いたとされる「寺子制誨之式目」という教訓書の中にある一節で、「人の人たらざる人は人を人とせず」という文がこれに続いている。諸本の中には都合10個の「人」の字が列んでいるだけの場合もあって、送りがながないと何のことか分からない。あるいは、絵文字遊びのように、手習いに来る子どもたちの意表をついて、教訓を垂れる素材にしていたとも考えられる。

ここには、自らが人間として優れていなければ、教師として人を導くことはできない、子どもを教育するのは、容易なことではないという峻厳な思想が見える。この「制誨之式目」の条文は、姿形を変え、その後広く教訓的教材として流布したらしいので、この一文はもとよりこうした考え方は、伝統社会の教育関係の中に深く息づいていたと思われるのである。

実はこの条文の後に、「諸人敬、殊に弟弟子をば随分取立候様に、養育可被仕事」とあって、子どもたちが後輩を導くように育てよと述べているのであるが、どう考えてもこの一文は教師に対する訓戒であり、子どもに対するものではない、落ち着いた悪い文章なのである。しかしながら、ここに、「人の人たる人」としての教師のありようや、子どもにとっての位置関係を知る手がかりがある。

1. 寺子の生態と指導の工夫

すでに室町時代の連歌師宗祇(1421-1502)が、嘆息混じりに「朝起きはせて昼寝して 手ならふ事は いやかりて 戸かへ障子に ものかきて 里すきはして 手はすかて たたみ柱に 墨つけて (中略) 物しかしかと をしへねは 手のあからぬも 道理やと 我とわかみに 理をつけて」(「児教訓」)などと描いているように、ものを学ぶ子どもたちは何時の世も凄まじく、また身勝手であったようだ。「制誨之式目」の作者も、「かくあるべからず」という好ましくない生態を指摘しているが、そのような姿が普通に見られたからだろう。授業中の態度であろうが、「机に懸て無益の雑談、或は欠気し、延し、或は居眠、

鼻を吸、紙を噛み、筆の管をくわへ、不習人を手本とする事、極悪人の所業なり」と、不真面目な学習態度を戒めた箇所がある。そのような寺子に対する「極悪人」という言葉が印象的だ。

田原の洋学者渡辺崋山（1793-1841）が描いた有名な「一掃百態図」は、子どもたちの学習態度をやや誇張して伝えてはいるが、こうした子どもの姿と符合する。崋山は、真面目に手習いする子どもばかりでなく、墨を付け合う子どもたち、喧嘩を始める子ども、明らかに手習いに飽きた子どもなど、さまざまな寺子の姿を象徴的に描いたのである。『幕末明治の生活風景』（須藤功編著）の中にある寺子屋図も同様であり、子どもの居眠り、立ち歩きなどが見られる。「新柳多留」十三に、「坊主畳を墨染めの手習い子」という句があるが、表のすり切れた畳にまで墨で汚して帰る「極悪人」どもの姿が彷彿とする。彼らの衣服や顔も、墨で汚れていたのではないだろうか。

幕末には全国津々浦々に至るまで普及した寺子屋は、主に手習いを教え、次いで文字の読み、文の意味や教訓、関連する事柄や世界について教えるという形の、初歩的学習の機会であり、中には算盤や裁縫・作法などを教授する場合もあったとされている。相対的に少数であるが、女子も就学していた。こうした教育文化の上に明治の初等教育が育っていったのであり、近代教育の基底としての意義は十分に評価されなければならないが、実態はこのように雑然としたもので、規模も、わずか数人の寺子が通う所から、100人を越す大規模寺子屋まで様々であった。年齢や進度によって区別せず、ひと部屋で教育活動を展開したので、寺子屋の師匠は学習者の管理に腐心せざるをえなかったのだ。

2. 教師の社会的地位

近世は、生業（なりわい）としての教職が成立し、身分や学歴、個人の力量に関わらず社会に解放された時代であったと考えられる。つまり、誰もが私塾（寺子屋）を開業できたのだ。

しかし、新たな生業は身分制原理を崩す危険があったし、必ずしも定住を原則としない。1611（慶長16）年に松平忠輝が発した「示書」に「出家・神主・儒者・医者を始め由緒あるものをかるんずべからざること」（『柏崎編年史』上）とあるのは、それらの職業に就くものが増えてきたこと、加えてそれらが封建的身分秩序の外にあるものであったことを反映している。逆に、1651（慶安5）年正月に尾張藩が出した町触れでは、よそ者の「牢人医師・同儒者」には無闇に宿を貸してはならないとしているし、翌々年の触れでは「道心者」「諸医師」「陰陽師」「謡舞教候者」にならんで「手習読物教候もの」が注意を払う

べき対象に挙げられている。人を導くものは、もともと意図的な保護がなければ、居住もままならない不安定な身分であったのだ。

石川謙博士の調査によれば、近世を通してみると農民・商工業者の師匠が約40%を占め、とくに農漁村地域では庄屋（名主）長百姓・組頭など有力農民が多かったといい、武士・僧侶・医者・神官がそれに続いたという（『寺子屋』）。八百屋の親父が突然今日から手習いを教え始める、などといった事例をみると、教師としての資格が問われることもなく極めて開放的な職業であったことが、師匠数の増加を可能にしたと考えられる。それは、教職の担い手が監視を要する「身分不確かな者」ではなく封建社会に組み込まれた「身分確かな者」へ、大きく変化したことをも意味する。

村落共同体が師匠を必要とし、子どもたちの教育を委ねようとする場合は、たとえ縁類がなく出自の不確かな者であっても、村や町が身分を保証することがあった。1801（享和元）年11月、越後の頸城郡小谷嶋村百姓（村役人）の源左衛門が、加賀の国の出と称する浪人助之進なるものを住ませ、村の子どもに手習いを教えさせた例がある。助之進はもともと近隣の青野村で書跡指南に携わっていたのだが、源左衛門が懇請して引き取ったと郡役所に届けている。その際「身分不埒之者にはこれなく」と保証したのである。1807（文化4）年正月、越後上板倉郷長沢村では、寺子屋師匠を村役人の「内人」として雇い、村寄り合いの座席も庄屋次座に格付けする旨を合意の上、寺子屋師匠と契約している。いずれも村請負の教師の事例であり、頻繁に見られるわけではないが、教職が社会的に確かな地位を持ち始めたことを窺わせるものである。かくして、「柳多留」三に「師匠様親類書の伯父に成」とあるように、ついには縁組みのための親類書きに名を連ねるようにさえなった。

やはり越後の例であるが、新発田藩溝口家が1780（安永9）年に制定した「新律」中に、ほとんど他に類例を見ない教師保護を目的とした規則がある。それには、

一、師匠を殺候者 斬罪、敲疵付候者も平人より一等重取捌

但、学問之師ハ不及申、惣而其身一生渡世之業を習得候ものとあり、師匠を殺傷することは重罪とされた。同藩では、手習い、学問だけでなく、職業技術を伝授された者、親方なども「師匠」に準ずる法的保護を受けたのである。これらは、越後に限ったことではなく、教える者が尊ばれ、社会的保護を受けるといふ文化が徐々に育ってきたことを示している。

3. 師と弟子の間

では、師とは何であったか。江戸前期の儒学者、伊藤仁斎（古義堂、1627-1705）の言葉に「師は道のある所、師を崇ぶは道を崇ぶ所以なり」（『童子問』）というのがある。師は先達であり、師によって真理を得ることができるのだから、弟子は君臣の義、父子の親をもって仕えるべきだとする。当然、師たるものは手本であり、規範の体現者であることが求められる。「人の人たる人」は、子どもの身近にいて、生きる姿を具体的に示すものことだ。

近世の教育においては、学び手のあらゆる事が、内面のありように関わって評価される。職業生活や家庭生活に始まって人間の一举手一投足が、心の問題に帰せられる。それは、私塾（寺子屋）で学ぶ子どもたちにとっても決して例外ではない。「制誨之式目」などが事細かでヒステリックな禁条を書き上げているのは、学び手の心のありようを正そうとするからだ。

江戸時代を通じてよく読まれたとされる貝原益軒（1630-1714）の『和俗童子訓』（1710年刊）に、「古人、書は心画なりといへり、心画とは、心中にある事を、外にかき出す絵なり、故に手跡の邪正にて、心の邪正あらはる」と述べた箇所がある。ことは、手習いについての言説であるが、人間の生き方の全般に関わる原理を示しているのだ。人間の日常的な姿形（服装・面体）、行儀、言動もまたその人の心の顕れだと考える。例えば、書物の取り扱いの粗雑さは、「道」（真理）に対する心のありようを映し出しており、訓戒の対象となる。「式目」が、学ぶ者はまず、心を綺麗にすることが基本だと言うのも同様の趣旨である。

それゆえ、師が真理と極めて近接したものと見なされると、子どもにとっては絶対的存在となる。日本の伝統的学問や芸術が「師に倣う」特性を持ち、知識や技術が特定の師の「教え」と結びついた、人間的ではあるが、独立性・客観性の低いものとなったのもこのような師弟関係が介在していたからだ。それゆえ、近世の学問が、儒学であれ国学、洋学であれ、自らの「学統」の正しさを以て学説の正当性を明示するという体質を持っているのは、このような事情と無関係ではない。当然、明治以降に流入した西欧近代科学の方法や精神とは相容れないものだ。

往時を美化するつもりは毛頭ないが、「試験前、大道急に復活し（蚊声）」という昨今の学生の姿をみると、緊密な師弟関係を前提とした人間教育の本旨をもう一度考え直してもよいのではと思う。

（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）